<翻訳>

砂上の楼閣

シュテファン・ハイム
山　根　　宏・訳

「それにこっちの方も今にすっかり変わるわよ」わがエリーザベトはいった。目はあの輝きを帯びている，私が「インターショップの目」と呼んでいるあの目だ。ショップに入って，強い西の通貨でしか買うことのできない西の商品が並んでいるのを見ると，きまってこの目をしたものだ。今となってはショップなんて誰も必要とはしていない，向こう側に行ってくればすむことなのだから。もっとも，通貨の問題があいかわらず残ってはいるが。「すっかり変わるわよ」エリーザベトはいう。「とくに不動産よね，ものすごく値が上がるわよ」こいつは驚きだ，不動産だと。どこからそんな言葉を仕入れてきたんだろう。

「ほんとに良かったわね，私たち」エリーザベトは続ける。「まだ誰もそんなこと考えつきもしないうちに，住宅管理公社からこの家を買い取っておいて。それも東の3万5000マルクよ，はした金じゃないの。そのうち，50万とはいかなくてもそれに近いところまではいくわね，強い方の通貨でよ。近所の人は住宅管理公社にあいかわらず家賃を払っているものだから，統一が実現して新しい法律がどうのこうのということになったら，いつ追い出されるか分かったんもんじゃないわよ。そこへいくと，個人財産は個人財産なんですからね，こればかりは誰も手が出せないわ。でもね，買いなさいよって，口を酸っぱくしてあなたに勧めたのは誰だったかしら，弁護士を雇って売買を法的に確かなものにするまで，あなたのお尻を叩いてあげたのは誰だったかしら？」

「エリーザベト」と私はいった。「きみは世界一頭のいい女だよ」

これを言わせたいのだ，わがエリーザベトは。こんな会話が楽しくなごやかにいつまでも続いていたことだろう，家の前であの砂利のきしる音さえしなければ。自動車の音だ，それもかなり大型らしい。「お客さんかな」と私はいった。「こんな平日に誰だろう」

妻は窓の方に行く。「あっ，やっぱりあの人だ」

「あの人って，誰だい？」

「前にここに来た人，二回も来たのよ」

「それを今日初めて聞くってのはどういうわけだね」

「心配させたくなかったのよ。家の斜め前に車をとめて，車から下りてきて何度も家の周りをうろうろしてたの。何回も立ち止まっては捜し物でもしてるみたいにきょろきょろして。よっぽど出て行って，秘密警察の方ですかって，いってやろうかと思ったんだけど，あれはもう無くなってしまっているし，どうしようかなと思ってるうちに，どこかへ行ってしまったのよ」

「確かにそいつかい。だけど二人いるぜ」

妻は唾を呑込んだ。「増えたんだわ」

「きみが見たのはどっちなんだ？狭いつばのついた帽子をかぶった，ころんとしたチビの方か，それとも今にも泣きだしそうな顔をした痩せたやつか？」

「チビの方」

「チビの方か」それにしてもそんな男が私を不安がらせるかも知れないと妻が思ったのはどうしてなのかと訊く前に銅鑼が鳴った。

*

わが家ではこの間から鐘がわりに中国製の銅鑼を使っている。あの胸に響くディン・ドン・ダンという音色はいつ聞いても楽しいものだが，この時ばかりはその異国的な音が神経にさわった。わがエリーザベトも根が生えたように立ちつくして唇をかんでいる。

「開けてきなさい」と私はいった。「あの二人は何か用があるんだろう。私だって，何の用があるのか知っておきたいからね」私たちは手に手をとって玄関にむかった，二人の方が心強い。小男は頭から帽子を取ると，足を後ろに引く格好でお辞儀をした。痩せた男がきれいな歯をみせた。「ボーデルシュヴィングご夫妻でいらっしゃいますな？」

たしかに私の名前はボーデルシュヴィングだ，有名な牧師と同じ名前だがこの牧師と私の家系とはまったくつながりがない，また，わがエリーザベトも結婚によってこの名前を名乗るようになっている。

「構いませんか？」痩せた男が訊いた。

わがエリーザベトの目がキラリと光った。だが今度は，さっきとは違って脅すよう

な暗い光だ，私はこれを「負けるものかの目」と呼んでいる。

小男は玄関マットで靴をぬぐっている，念入りに時間をかけて。まるで自分の家みたいにしてやがる，わけもなく私の頭をそんな思いがよぎった。軽そうな灰色のコートを脱ぎながら男は名を名乗った。「エルマー・プロットヴェーデルと申します」「よろしく」と私。

「シュヴィーブスです」もう一人はそういうと名刺を差しだした。「シュヴィーブス・シュヴィーブス・クリングス法律事務所のシュヴィーブスと申します，不動産関係の相談を扱っています」

「うちは」と，わがエリーザベト。「だれにも相談なんかいりません」

こんなやりとりをしている間にプロットヴェーデル氏は，夢遊病的としかいいようのないほどわき目もふらず，開けたままになっていた引戸を通って居間に入ってきて，まっすぐに安楽椅子に向かっている。高い背もたれのついたこのビーダーマイヤー様式の安楽椅子はつい先日，やっとのことで修理を終えたばかりだった。椅子の詰めものをやってくれる職人や，金と小さな花模様がストライプになった布地を見つけるのがこの国ではどんなに大変なことか。小男は，ああ，と叫んで，まるでそいつの尻にあわせて誂えたような椅子にどっかと座ってこう言った。「これは祖父が愛用していた椅子なんですよ。昔は緑の布が張ってありましてね，緑に藤色のバラをあしらったやつでした。祖父はここに座ったまま亡くなったんです，心不全でした」

わがエリーザベトは真っ青な顔をしている。爺さんの臨終の場面を想像してではない，そんなデリケートな女じゃないんだから。そうではなくて，ひょっとしたらこの安楽椅子が本当にプロットヴェーデル氏の祖父のものだったかも知れないと心配してるのだ。実を言うと，これは自分で金を出して買ってきたものではない，前任者であったヴァツリク同志から譲り受けたものだ。後任の局長となった私にこの家を明け渡すときヴァツリクはこう言った。「この椅子は君に譲るよ，ベルリンに行ったら家具は新しくするから」

「ひょっとしたら」とシュヴィーブス法学博士。じつに品のいい話し方をする，リューベックあたりの話し方なのだろうか。プロットヴェーデル氏にむかって言った。「ひょっとしたら，訪ねてきた用件をお話しておいたほうがいいんじゃありませんか」

「もったいをつけるのもいい加減にしてほしいわ」と，これはわがエリーザベト。

プロットヴェーデル氏はその小さい口をボタン穴の形にゆがめた。「奥さん，以前，私がこの土地の前に来たのはお気づきになりましたね」

「ええ，二回」とわがエリーザベト。「二回も見ましたわ」

「あなたを驚かしたのでなければいいのですが。ただ懐かしかったものですから。ここで過ごした青春時代はじつに楽しいものでした，父は優しかったし。その父が，いいですか，よく聞いて下さいよ，生前にこの家を土地付きで買い求めたのです」

「プロットヴェーデルさんは」とシュヴィーブスが口をはさむ。「さいわいなことに順風満帆といったところでして，西では少しは名の通ったビール会社をお持ちで，ほかにもいろいろ出資していますから，そこから十分なお金が入ってきます。そんなわけですから，ほんらい自分のものである不動産をここらで取り戻しておいたほうがいいかな，などと考えなきゃならないような，そんな困難な状況にあるわけでは決してございません」

「取り戻す，ですって」わがエリーザベトの顔がほんのり紅潮する。さあ，警戒信号だぞ。「取り戻すだなんて」とエリーザベト，「なんのことをおっしゃってるんだか」

「ボーデルシュヴィングさん，この家の保存状態がいいのを確かめることができてうれしく思いますよ」とプロットヴェーデル氏。

「そりゃそうですよ」とシュヴィーブスがいう。「ボーデルシュヴィングさんは信頼のおけるきちんしたお方だとうかがっておりますが，なにせご自分たちでこの家をお使いなんですから」

わがエリーザベトの顔はかすかなバラ色からはっきりと赤に変わった。「使っているだけじゃありませんわ。お二人にはっきりと言わせていただきますが，これは私たちの家なんですからね。お金を払って買ったんです，椅子もこみで。ちゃんとした売買契約書もあります，法的な登記も済んでるんです。なんならご自分で確かめられてはいかがですか」

「それはシュヴィーブス氏が土地台帳でもう確かめております」とプロットヴェーデル氏。「だからといって，家を訪ねて中を見てまわるのがいけないということにはなりますまい」

「プロットヴェーデルさんが」とわがエリーザベト，「思い出にひたりたいというお気持ちはよくわかりますわ」そういって思いついたようにつけ加えた。「それに今じゃ，ついこの間までのように，国境を越えるのに25マルクは必要ありませんものね」

「さて」とプロットヴェーデル氏，「ここらで二階を見せていただきましょうか」

*

ここで足音がしたかと思うと今度はあちら，そして私の頭の中で反響する，気が狂ってしまいそうだ。

「どうしてあいつらをほうり出さなかったんだろ」

「あの人たちの家じゃないんですからね，好きかってにあっちこっちうろつかれるのは嫌だわ」

「まるで占領軍みたいじゃないか」

「あら大変，お風呂場はかたづけてなかったのよ」さっきから顔の赤みによって予告されていた怒りがついに爆発した。「こんな厄介なことをわざわざ自分から，さあどうぞってしょいこんでしまうなんて！」

「抑えろよ」と私，「聞こえるぞ」

だがもう抑えることはできない。「これは私たちの家じゃないの。自分の家なんだから，好きなように吠えさせてもらいたいわ！」

それだけいうと静かになった。それからプロットヴェーデル氏の声がした。「済みましたよ」

「いかがでしたか？」とわがエリーザベト。

プロットヴェーデル氏はエリーザベトの視線から体を守るように，安楽椅子の後ろにまわる。「部屋の調度は私の思い出どおりでした」

「思い出は人生の半分といいますからな」とシュヴィーブス氏。そして「じつにしっかりした家具です」とプロットヴェーデル氏がいう。

シュヴィーブス氏はしばらく考え込むようにして黙っていたがこう言った。「あなたがたが，恨んでいらっしゃるとまではいいませんが，どうしてそう私たちに反感をお持ちになるのか，わかりませんな。プロットヴェーデルさんは思い出を新たにすることのほかには」こういいながら上着の胸ポケットのハンカチの陰から紙切れを取り出した，「マルシャル・コーニエフ通り，旧ヒンデンブルク通り27番地の家と土地の所有権の問題を速やかに解決したいと考えておられるだけなんですよ」

「解決するようなことなんて何もありゃしませんよ！」わがエリーザベトは地団太踏んでくやしがる。「家も土地も私たちのものです。個人の所有権は，いつであろうとどこであろうと，国家が保護してくれます，東も西もあるもんですか」

「そこなんですよ」とシュヴィーブス氏，「まさしくそこが問題なんですよ。それともなんですか，二つのドイツ国家が再統一したあかつきには，それに伴って法的な

いろんな問題が起こってきましょうが，そんなごたごたは避けるに越したことはない，とはお思いにはなりませんか？」そういって黒いモロッコ革の書類鞄から何枚もの書類を取り出すとテーブルの上にひろげてみせた。シュヴィーブス氏は滔々と論じる。「ここにある書類から明らかなことは，ディートマー・プロットヴェーデル氏，つまり，わたしの友人かつ依頼人であるエルマー・プロットヴェーデル氏の父親でもう亡くなられましたが，その，プロットヴェーデル氏が1936年に当時のヒンデンブルク通り27番地の土地及び家屋をジークフリート・ロートムントという人から，この人はその後まもなくドイツを離れどこへ行ったか分からないのですがね，ともかく合法的に買い取ったということであります。その購入金額というのが，これはもう運命としかいいようがないですなあ，ボーデルシュヴィングさんご夫妻が住宅管理公社から安くお買いになった金額とぴたり同じの3万5000マルクなんですよ。どうぞ，これが売買契約書です」

「わたしたちは，あなたがたをドアの外に追い出そうなどとは夢にも思っておりませんよ」とプロットヴェーデル氏。

わがエリーザベトの唇はわなわなと震えている。「だれが自分の家のドアの外に追い出されたりするもんですか！」

「今のところ，あなたがたに何かを要求しようとも思っておりません」とプロットヴェーデル氏は薄笑いを浮かべている。

「つまり」と私が口をはさむ，「とっくに支払いの済んでいるものに対して，もう一度払えということですか？」

「お金のことは，さきほどから問題にはしておりません」とシュヴィーブス氏が割り込んできて，また，まくしたてる。「プロットヴェーデルさんにしましても私にしましても，肩書と名誉を重んじる人間です。ですから，ボーデルシュヴィングさんご夫妻が現在のマルシャル・コーニエフ通り27番地の土地と家屋についてお持ちの権利をいささかも疑うものではございません。ただ，プロットヴェーデルさんの方でも権利をお持ちなわけでして，どちらの方が先かが問題となりましょう。また，これはもっと大事なことかと存じますが，法的状況の変化に照らして，それぞれがその財産をどうやって手に入れたか，それも問題になります。その入手方法が，おそらくは近々こちら側にも適用されることになるであろう法律からみて，合法的かつ正当がどうかということですね」

「なにしろ両親の家は」とプロットヴェーデル氏，「没収ですからね」そういうと，どうだ，とばかりにぎょろりと白目をむいた。「補償金もなにもなかったですよ」

*

ただ待つだけというのはなんと忌々しいことか。あの二人がまた来るだろうことはわかっていた。ただ，それがいつなのか，わからない。今や無意味になってしまった職場での，これまた無意味でしかない仕事を終えて家に帰り，部屋に座っていても，気がつくと外の物音に耳を澄ましているということがしばしばあった。私たちは真夜中にも起きてしまう。隣で寝つけずにいればいやでも感づいてしまう。せわしい息づかい，不意に体が動く，するとたちまち，あれやこれや考えはじめてしまうのだ。こんなことってあるもんか，これまでずっとそれなりの人生を送ってきた，ところが今になって，永遠にとはいわないまでもかなりの期間にわたって大丈夫と思っていたものが，一挙に崩れてしまうなんて。しかしまあ，家はまだ建っているんだし，自分たちのものだ，もぐり込む屋根だけはまだなんとかあるさ。

「なにさ」とわがエリーザベトがいう，「あの人たちの思うようにいったりするもんですか！国が一つになろうとなるまいと，財産は財産ですからね。それにしても，向こうの人たちってなんて人なんだろ。おとなしくしてればいい気になって，ちょこちょこっと来ては，これはお祖父ちゃんがお気に入りの安楽椅子でした，なんて」

こんなときは沈黙が金にはならない，不安を吐き出さないといけない，でないと頭がおかしくなってしまう。「でも勝ったのはあの連中だからな」と私。「しかもぼくらが連中をこの国に引き入れたんだ，壁が壊れたら，ドイツ万歳，ドイツ万歳だったからなあ。確かに昔だってけっして甘いもんじゃなかった，年がら年中，『はい』の返事と服従で，その見返りにちょくちょく特典があるくらいのものだった。でも少なくとも，きみに持たせてくれたこの家だけはきみのものだったよ，きみも自分のベッドでゆっくりと休めたのに」

「あなたは撃たれる前に負けてるのよ。プロットヴェーデルがなによ。たかがちゃちな自営業じゃないの，そんなものあっちじゃ掃いて捨てるほどいますよ。あなたは自分がなんだったか忘れたの？何人の部下をもってたと思うの？ただの人だったらとっくの昔にお払い箱になってたわよ。それなのにあなたは，向こうの大臣だか次官だか支配人だかはあなたみたいな人間を必要じゃないだろうって思いこんでいるのよ。いろんな省にコネがあって，それぞれの省がどうつながっていて，どうもつれているかを知っている人間がいらないというの。まあ，もうしばらく待つことね，そしたらプロットヴェーデルもシュヴィーブスも叩き出せるから」

さすが，わがエリーザベト，背中に筋が一本とおっている，しかもどんなチャンス

も見逃さない。なるほど，この国のものごとの決まり方も，あちら側で上の人間と下の者とがぶつかる場合も，やりかたにおいてそう違っているわけではないことに私も思い当たる。文字どおり，感きわまって私は言った。「エリーザベト，いつもながら，きみの言うとおりだよ。あんなやつらの脅しに負けてたまるか」

*

とはいいながらも，またもや砂利のきしむ音がして，続いてディン・ドン・ダンと鳴ったときには肝を冷やしてしまった。

「郵便だろう」と言ってはみたものの，本当にそうだったらなんと滑稽なことかと考えている。わがエリーザベトの目はまたしても光っている。私の手を取ったが，郵便配達と思っているのであればこんなことは決してしたりはしない，くじけまいとたがいに支えあうようにして玄関に向かう。ところがそれは，郵便配達でもプロットヴェーデル氏でもなければその友人のシュヴィーブス氏でもなかった。ドアのところに立っていたのは一人の女性だった。髪は黒く，一種独特な顔立ちをしている。驚いて思わず脇によけると，この女性はずかずかと入り込んできて，つい先だってのプロットヴェーデル氏と同じく，夢遊病者のようにわき目もふらず，あの安楽椅子に向かった。

「それはきっと」と私，「お祖父さんのお気に入りの椅子だったんでしょう」女ははっとした顔をする。「どうしてご存じなんですか？」

「あなたはロートムントさん，そうですね？」

「はい，エーファ・ロートムントです。テル・アヴィブからやってきました」そういうと女は椅子に腰をおろした。プロットヴェーデル氏よりはほっそりしている。

「あなたもやっぱり思い出を探していらっしゃるんですか？今じゃあ，国境を越えるのに，あの25マルクもいらなくなりましたからね」

「私には思い出なんかありません。この家にもありませんし，ドイツにもありません。ただ間接的な思い出ならひとつだけあります，この椅子です，祖父がよく話してくれましたから」

「それでご用件は？」と私は訊く。

「私は相続人なんです」

「そうでしたか」しばらくして私の頭に不敵な考えが浮かんだ。「そうなると，話はぜんぜん違ってきますな」

「どうしてですか？なんのことでしょう？」

「ロートムントさん，あなたと手を組んで，プロットヴェーデルとシュヴィーブスを叩いてやりましょう」

だがわがエリーザベトはこれにはあまり気乗りがしないらしく，こういった。「でも，ロートムントさん，あなたのお祖父さんはその財産をプロットヴェーデルという人に売ってしまわれたんじゃないんですか？」

「売った，だなんて」ロートムント夫人はかつてお祖父さんが愛用した椅子から立ち上がると，ハンドバッグ ── これは安物の茶色の革だった ── から，何枚もの書類を取り出すとテーブルの上にひろげた。「この書類を見ていただければ，私が祖父ジークフリート・ロートムントのただ一人の正当な相続人であることがおわかりいただけます。祖父は1936年2月23日にSSの突撃隊長ディートマー・プロットヴェーデルに，お前を逮捕して強制収容所にぶちこむぞと脅されて，ヒンデンブルク通り27番地の土地と家屋の名義をそのプロットヴェーデルSS突撃隊長に変えたのです。そのこともこの書類から明らかです」「脅迫であろうとなかろうと，そんなこと関係ないわよ」とわがエリーザベト。「不動産が自分の財産であるかどうかで決定的なことは，取引の時に何を話したかじゃないのよ，あなたのお祖父さんが3万5000マルクを引き換えに受け取ったかどうかなのよ」。私には妻の頭の中が読めてきた。どうやら本当にわれわれの財産に対してもともとの権利を有しているらしいこのイスラエルの女性こそもっとも手ごわい敵なのだ。むしろプロットヴェーデルとシュヴィーブスのほうが容易に話がつくだろう，とりわけこのロートムント夫人が出現した今となっては。西であれ，東であれ，ともかくドイツ人同士なんだから。

「いま」とロートムント夫人，「自分の財産であるかどうかで決定的なことは金額を受け取ったかどうかだとおっしゃいましたわね？」

「じつはね，私たち」とわがエリーザベト，「あなたのお祖父さんとディートマー・プロットヴェーデル氏との間で交わされた契約書をこの目で見たんですよ」「これを見て下さい」とロートムント夫人は書類の中から一枚をつかんだ。「祖父の直筆の署名のある宣誓書です，亡くなる前の日に公証人が立会って作ったものですが，内容は，ヒンデンブルク通り27番地の土地と家屋の売却，ならびにそれに付随する売買契約は無効であるというものです。理由は，プロットヴェーデルSS突撃隊長が契約書で定められた3万5000マルク ── これはこの不動産の本当の価値からいえば何分の一にしかならない額なんですが ── それを支払わず，自分の懐にしまいこんだから，となっています」

わがエリーザベトは口を開けるが声にならない。「でも，それじゃあ，この私たちはどうなるんですの？」とやっとのことで訊く。そしてかなりの間をおいてこういった。「ロートムントさん，私たちのことも考えていただかなければいけませんわ」

わざわざイスラエルからやってきたロートムント夫人にこんなことを言っていいものかどうか，私にはよくわからない。しかし，なにもかもがどんどん変わっていく私たちのおかれたこんな状況にあっては，何と言えばいいのだろう？

【解説】

ここに訳出したのはシュテファン・ハイムの短篇集『砂上の楼閣』(Stefan Heym:"Auf Sand gebaut", C. Bartelsmann 1990) に収められた表題作である。旧東ドイツにおける体制批判作家としてのハイムについては別のところで論じたことがあるので，ここでは東西ドイツ統一後のハイムの最初の作品集である『砂上の楼閣』について少し紹介しておくことにする。

統一と同時に，旧東ドイツの作家，とりわけ体制批判作家はもう書くことがなくなってしまうのではないか，と気の早い心配をするむきもあったが，――事実，もう何も書けない，と一時期クリストフ・ハインがもらしていたとの話を伝え聞いたりもした――そうしたなかにあって，新たな状況がもたらした問題をテーマにしたこの作品集は老練作家ハイムのしたたかさをうかがわせるものである。

この作品集には表題作をふくめて全部で七篇の小説が収録されている。いずれも壁が崩壊してから統一までの時期の東ドイツを舞台にしたもので，混乱期の東ドイツの人々が直面したさまざまな問題を取り上げている。文学作品としての評価はともかく，またまくまに歴史の中で消えてしまうであろう時代の証言としてして貴重であるとはいえよう。

歴史の激変のなかで個人が投げ出される相当に深刻な状況を描きながらも，短編集の全体に軽妙な印象が拭いきれないのは，焦点を当てられるのがいわゆる庶民ではなく，むしろ旧社会の上層部に属していたとみられる人間であるためであろう。かれらは時代の変化をいちはやくかぎつけ，新しい波にうまく乗ろうとして失敗する。個人として見ればかれらにも同情の余地がなくもないが，過去の誤りを誤りとして認識することなく新しい状況の中でひたすら保身に努める姿勢が作者によって批判されている。

昨年秋に行われたドイツの総選挙の後，思いもかけない形で日本のマスコミにハイムが登場した。11月10日の朝日新聞夕刊は「仮議長は秘密警察協力者？」と三段にわたる見出しで記事を載せている。記事そのものは短いものなので全文を掲げることにする。「ドイツ連邦議会は十日，院の構成を行う総選挙後初の本会議を開くが，開会演説を行う仮議長，民主社会党（PDS，旧東独共産党の後身）系のシュテファン・ハイム議員（81）が，『シュタージ（旧東独の秘密警察）の協力者だった』との疑惑が九日，浮上した。西ベル

リンに亡命していた反体制活動家をシュタージが1961年に拉致した事件の裁判で明るみに出たもので，53年の反政府暴動後，指名手配されていたこの活動家についての情報をハイム氏が58年ごろシュタージに提供していたというもの。ハイム議員は，先月の総選挙でベルリンの小選挙区から当選して民主社会党の躍進の基礎をつくった。今期の最年長議員でもある」。

この記事から大方の日本人読者が読み取るのは，ハイム氏はSEDの後身であるPDSの躍進の原動力となった大物政治家で，どうやら悪名高いシュタージとつながりをもっていたらしい，ということであろう。この記事は意図的なイメージ操作を狙っているとすれば悪質であり，西側ジャーナリズムの報道を安易に利用したのであれば，特派員が自分で書くという姿勢の欠如と理解の不十分さは批判されるべきであろう。というのも，たしかにFAZも見出しは「ハイム，シュタージと接触か？」となっているが，この件はハイムの開会演説を妨害するために捜査局からの内報を連邦内相が暴露したことが読み取れるし，ハイムがシュタージにかかわる活動をしていたことを示す証拠はない，との検察庁の談話をあわせて載せているからである。統一後の文学ジャーナリズムにおいてクリスタ・ヴォルフ批判キャンペーンで露骨にあらわれたように，東と西の見えざる壁が厳として存在する限り，そのことに鈍感なまま，どちらか一方によりかかって報道することははなはだ危険であろう。

朝日の記事と比べると，11日の毎日新聞夕刊は全体としてはずっとましなものになっている。「伯仲国会，波乱の幕開け」の見出しで，ハイムの一件をセンセーショナルに取り上げるのでなく，波乱の幕開けのひとつのエピソードとして触れるにとどめ，その背景にも言及している。ただ驚いたことに「同（ハイム）氏はドイツを代表する作家として知られているが，旧東独時代に旧東独政府の『御用文化人』だったという批判があり，与党側は（ハイムが開会委演説を行うことに―引用者・注）不満を表明。」とされている。ハイムのどこをたたけば「御用文化人」なる音が返ってくるというのだろう。

朝日・毎日という日本を代表するとされる新聞の特派員の署名記事がこの程度では，われわれはいったいどんな記事を読まされているだろうか，と不安になってくる。文学という現象を社会の一側面ととらえるならば，われわれにも果たすべき社会的使命があるといわねばならない。 (1995.02.14.)